

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ひとつことお礼を

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1981-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 慎吾, Kawai, S. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2215">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2215</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ひとことお礼を —

河 合 慎 吾

我が儘の限りを尽し春を待つ 風 生

「定年退職の感想を」といわれ、回顧すると、まずこの句が、うかんで来る。一昨年、93才で逝去した『ホトトギス』の長老、富安風生の最晩年の作という。つまり、「我が儘の限りを尽し定年に」というわけである。

本当に我が儘、気ままな35年間であった。いちいちお名前は挙げないが、これを許していただいた関係各位に対し、心からお礼を申しあげたい。

どなたかの還暦の弁に「自分の一生の前 $\frac{1}{3}$ は、黒板に向って坐り、後の $\frac{2}{3}$ は黒板を背にして坐っていた」というのがあった。私も1939年学窓を出てから、45年までの財団法人東亜研究所（1938年、時の首相近衛文麿を総裁にかついで“東亜新秩序”の理論的基礎づけをうたい文句に、企画院の肝入りで創設された研究機関）での数年間の研究生活を除いては、外専、外大を通じて、黒板を背にしてのチョーク暮し。今、それが終わったとき、その有難さを改めて痛感している次第である。

思えば、教師生活というものは、結構なような、また恐いようなものである。前者の例を一つだけ。数年前、同窓会の東京支部の大会に招待されたことがあった。席上、白髪の美しい初老の紳士が、航空評論家として著名な関川栄一郎氏で、外専ロシア語科の第1回の卒業生だということは、名刺を出して挨拶されたあとも、かつての学生服のイメージとは結びつかない感じであった。

その関川氏が、テーブル・スピーチでいう。「はじめて会った教室で、先生は“学園とは何か」と問い、いきなり黒板に“Schicksalsgemeinschaft”と大書されました。辞書をひくと“運命共同体”とありました。以来、これが私の学校観の基盤になっています」と。30年ぶりに再会した老教師への同氏

の“いたわり”であろうが、まさに教師冥利に尽きるというべきであろう。

寄る年波のせいも、近頃、“まわり合せ”というようなことが、思われてならない。退職後は、気楽に「晴耕」は無理でも、せめて「雨読」くらいは、楽しみたいと願っていたのに、思いもかけぬ新設職業短大の学長稼業ということになった。これも、一に“まわり合せ”というべきであろう。

この4月の開学式では、がらにもなく「この新しい島の一隅に、新しい理想の学園を」などと気焰をあげたら、公立短期大学協会を代表して、祝辞を述べていただいた同会副会長の愛知県立看護短大の北野学長から「理想を説くのもよいが、現実の困難さを直視することも忘れないで」と、やんわりと窘められた。この北野学長のご忠告の深い意味が、日一日と思い知らされるような昨今ではある。

「ひとことお礼を」のつもりが、饒舌に過ぎたようである。最後に35年間のご寛容に対し、重ねて厚くお礼を申しあげるとともに、目前にせまった移転を契機に、外大が一層のご発展をとげられんことを祈って終りとしたい。有難うございました。

(1981. 8.15)